

第1回 豊岡市多様性推進・ジェンダーギャップ対策検討委員会

第1回 豊岡市多様性推進本部 ジェンダーギャップ対策部会・多文化共生推進部会 会議録

日時 2026 年 7 月 28 日（火）13：30～16：10

場所 豊岡市役所 2 階 大大会議室

出席者

外部委員：出席 13 人、欠席 2 人（敬称略）

赤松まり子、井垣真紀、石高真二、大槻恭子、岸田尚子、久木田里奈、佐藤令奈、高橋正透、高柳光昭、
瀧下真理子、廣井由美、三浦健太、姚瑶（欠席：西村勲、平峰英子）※敬称略

庁内委員（部会）：出席 12 人、欠席 2 人

大谷祥悟、福田一成、西澤紗織、岡本優嗣、太田垣輝尚、木内純子、小操加奈子、山田晃子、伊藤八千
代、中田啓之、伊崎宏典、三輪純子（欠席：谷垣茂彦、羽尻エミ）

アドバイザー：大崎麻子 氏、田村太郎 氏

事務局

副市長：土生田哉

くらし創造部部長：太田垣健二

多様性推進・ジェンダーギャップ対策課：原田紀代美、道下一、稲田直子、大森毅

議事経過

1 開会（13 時 30 分）

事務局より開会を宣言。会議の記録（写真撮影・音声録音）および傍聴受付について周知を行った。

2 副市長あいさつ（土生田副市長）

豊岡市が 2015 年の分析から「若年女性に選ばれていない」事実気づき、ジェンダーギャップ解消や多文化共生の取り組みを推進してきた経緯を説明。自身が副市長就任時に「男性職員の育休取得事例」を女子職員からの指摘で気づかされたエピソードに触れ、当たり前とされていることへの「声出し」と双方の尊重が重要であると言及。ジェンダーギャップ解消や多文化共生への取り組みは道半ばであり、多様な人々が笑顔で暮らせる地域づくりに向けた活発な議論を期待する旨を述べた。

3 委嘱書交付

検討委員を代表して、城崎小学校の赤松校長へ土生田副市長より委嘱書を交付。（他の委員へは机上配布）

4 アドバイザー紹介・挨拶

大崎 麻子 氏（豊岡市ジェンダー平等推進アドバイザー）

豊岡市が、若年女性の転出とジェンダーギャップの関係を明らかにし、地域政策として取り組んできたことが、国の「若者や女性にも選ばれる地方」という政策にも影響を与えた先進事例であることを紹介。国の政策が「地域での社会実装」を重視する段階に入中、第5次男女共同参画プランへの期待を表明した。

田村 太郎 氏（豊岡市多様性推進アドバイザー）

人口減少が進む地方都市での関わりを紹介。外国人分野では国側の対応が過渡期にあるが、地域の視点から再構築していく重要性を述べた。

5 自己紹介

出席委員および庁内委員より、「所属」「名前」「事前質問（3題）のうち1題に対する意見」を含めた自己紹介が行われた。

主な意見（事前質問への回答抜粋）：

・学校・教育

大人世代のアソコンシャスバイアス（無意識の偏見）を払拭し、学校・家庭・地域が一体となった環境づくりが必要。

・地域のサードプレイス

固定観念やプレッシャーから離れ、多角的な視点や生き方に触れられる「サードプレイス（家・職場以外の居場所）」の存在が若い世代には重要。

・経営・企業の視点

単なる女性への配慮にとどまらず、企業が生き残るための戦略（人材確保・イノベーション）としての男女共同参画アプローチが必要。

・連携とプラットフォーム

1社・1団体でできることには限界があるため、組織や領域を超えた「横串の連携」や「情報共有」が不可欠。

・次世代の価値観

専門職大学等に集まる若い世代のリアルな価値観（共働きや育児観）を盛り込み、若者座談会やキャリア支援などを取り入れるべき。

・行政・防災・ケアの視点

避難所運営等での女性視点の不足、介護現場における男性の能力不足・ハラスメント課題など、具体的な現場課題の改善が必要。

6 委員長及び副委員長の選出

互選により、以下の通り選任された。

委員長：高橋 正透 氏

副委員長：瀧下 真理子 氏

7 今年度の取組概要説明（多様性推進・ジェンダーギャップ対策課）

本市は「豊岡市多様性推進方針」のもと、ジェンダーギャップ解消戦略と多文化共生推進プランを連動させて推進している。今年度は上位・基礎的計画の位置付けとなる「第5次豊岡市男女共同参画プラン」の策定を予定。持続可能な社会経済イノベーションへつなげ、市民・事業者・行政が自分ごととして行動変容を起こす仕組みづくりを目指す旨を説明。

8 情報提供・講話

(1) テーマ：「ジェンダー平等推進をめぐる国の政策の方向と第5次豊岡市男女共同参画プランへの期待」

講師：大崎 麻子 氏（豊岡市ジェンダー平等推進アドバイザー）

【要旨】

国の政策動向

第6次男女共同参画基本計画や男女共同参画基本法の改正（自治体における男女共同参画センター機能の確保義務等）により、地域の多様な主体の連携によるジェンダー平等の推進が明確に示された。豊岡市の取組は、こうした方向性に先駆け、「若者や女性にも選ばれる地方」を掲げる地方創生政策を牽引してきた。さらに、骨太の方針、日本成長戦略（AI・デジタル、GX、フードテック、コンテンツ等）、地域未来戦略にも女性活躍が明確に位置付けられている。今後の課題はこれらの政策の「地域での実装」であり、豊岡市が先進モデルを全国に示すことを期待している。

第5次プランに向けた視点

ウェルビーイングと自己決定を軸に、男女別データに基づく課題設定を行うとともに、定量的なKPIだけでなく、意識・行動・関係性などの質的变化も捉えることが重要である。また、AI・デジタル、GX、農業、観光、芸術文化などの成長分野にもジェンダー視点を組み込み、多文化共生とも連携しながら、多様な主体の協働によって、豊岡ならではのイノベーションを生み出し、新たな価値や市場の創出につなげてほしい。

(2) テーマ：「多文化共生と外国人受入れの現状と政府の動向について」

講師：田村 太郎 氏（豊岡市多様性推進アドバイザー）

【要旨】

外国人への「不安」の背景

コロナ明け以降、外国人住民が急増。就労も、建設業や医療・介護・サービス業など暮らしに直結する分野へ広がり、これまで接点がなかった地域でも外国人が増えた。このことが外国人への不安が広がる背景にある。

国の政策と自治体の対応

政府の外国人政策には「厳格化への転換」と「共生施策の継続」の二極化が見られる。一時的な不安の声に

左右されず、地域の実情に応じた着実な取り組み（日本語学習、相互理解）を継続することが大切である。
顔の見える関係づくり

外国人を単なる労働力ではなく地域社会の一員として受入れ、ニーズを世帯毎にアセスメントして、ライフステージの節目に合わせたサポートを行うことと、地域での「顔が見える関係づくり」を深めることが不可欠である。

9 協議事項（グループ意見交換）

「事前質問 3 題（プランの成功定義／若者が戻りたい豊岡／取り入れるべき視点など）」をテーマに、各グループで意見交換を実施。

各グループからの主な発表概要

A グループ：

「成功の定義」は固定化せず段階的に数値・実感値で評価すべき。食（オーガニック）や自然、安全・安心といった豊岡ならではの資源・価値（「豊岡カスタム」）を取り入れた暮らしの提案が魅力になる。

B グループ：

国や地域の固定観念、行政の方針に左右されず、結婚や出産、ライフスタイルを「個人が自由に選択できる社会」であることが重要。

C グループ：

若者や女性、外国人が自分のスキルを生かして「自己実現」できるまちづくりが必要。多様な取り組みの情報が分散しているため、一元化して共有できる「情報のプラットフォーム」が必要。

D グループ：

多様性は前提であり「見方や受け入れ方を変える」ことが重要。デジタル技術を活用することで、既存の障壁やハードルを乗り越えていくツールになり得る。

E グループ：

男性の孤立や介護能力不足、女性の自立・経済的課題など、性別ごとの具体的な困りごとに目を向ける必要がある。プレコンセプションケア（妊娠前の健康管理）や若年層からの健康学習、男女双方への相談体制の充実が必要。

F グループ：

市内事業者が「ジェンダーギャップ解消＝自社のメリット」と実感できる環境整備が必要。豊岡演劇祭や城崎国際アートセンターなど、多様な文化を受け入れる寛容性を強みとして世界へ発信していくべき。

10 アドバイザーコメント

大崎 アドバイザー

市民委員からは、属性にかかわらず、一人ひとりが自らの生き方を選択し、力を発揮して、ウェルビーイングを実感できる豊岡という将来像が示された。一方、庁内委員からは、男女によるニーズの違いを踏まえた政策・サービス、デジタルや地域資源の活用など、具体的な実装の視点が示された。こうした市民の目指す将来像と行政の具体策を結び付け、男女共同参画と多文化共生を横断して第 5 次プランを策定することを期待したい。

田村 アドバイザー：

「選択」「情報プラットフォーム」という言葉が印象的。豊岡の「現在の営みや暮らしやすさ」が常に外から見える状態（オープンな場）を作ることが、若者の還流や多様な人材の定着につながる。長期的な視点を持って推進してほしい。

11 事務連絡

次回の会議日程について事務局より案内された。

第2回検討委員会・部会：

日時：2026年10月2日（金）13：30～16：00

場所：豊岡市役所3階 庁議室

第3回検討委員会・部会：

日時：2026年11月9日（月）13：30～16：00

場所：豊岡市役所2階 大会議室

12 閉会（16時10分）